

【六百回の武甲山】

高十一回 関口洋介

私の住む川越の街並みから僅か西方向に歩くと、南から丹沢山塊、富士山、奥多摩の大岳山、御前山、の眺望が印象的です。更に右に目を移せば武甲山の三角錐が嫌でも目に入ります。そして殿には小川町の笠山が控えています。冬場には前面に雪を抱いた朝焼けの武甲山を見ることができません。もし二月の頃、早起きましたら独立峰の武甲山を眺めて下さい。快晴であれば、ピンク色に輝いた武甲山に出会えると思います。

私は中学時代雲取山に登ったこともあり、高校に入学し山岳部に入部しました。最初の山行は武甲山でした。私が部員であった昭和二〇年代には、西武鉄道は吾野駅までしか動いていませんでした。従って我々は、東上線に乗り寄居駅で秩父鉄道に乗り換え「お花畑駅」で下車しました。その日は土曜日の半ドンを利用して登ったため、今と違って石灰岩採掘が大規模に行われていなかったもので、正面から、東のドウエ、西のドウエを登って辛うじて夕闇せまる山頂に至りました。取り敢えずザックを御岳神社の社殿内に置いて、近くの屋根付きの東屋で早速食事を摂りました。高校の先輩方達は持ってきたポケットウイスキーを開けて我々後輩達に「飲め飲め」と言って半分強引に振舞いました。未だ十五歳の身で初めて飲む味はとても苦く胸が焼けるような心地でした。その後はふらふらして足が地に着かない程でした。それでもどうにか近くの社務所に置いていたシユラフに倒れこんだまま眠り、やがて朝を迎えた、という経験もしました。

武甲山への登山ルートは沢山ありましたが、現在は次のルートが一般的です。

西武鉄道横瀬駅から2時間ほどひたすら歩いて表参道の一の鳥居につきます。そこからは我々が俗に「おぼっ川」と呼んでいる生川沿いに歩き、鉄板の橋を渡らず右の道を行き、すぐにジグザグの登山道に入り、ゆっくり高度を上げて行きます。

もし鉄板の橋を渡って歩くと「持山寺跡」に着きます。寺跡には歴史があり、今も竹藪が登山者に黙して歴史を伝えています。更に登って行くと標高1088mのシラジクポに出て、右道を行けば武甲山頂までは小一時間で行けます。

大山の神を過ぎ、妻坂沢を合わせる頃には二の鳥居に着きます。側に丁目の石が認められる頃、移転した山頂には五十六丁目の石が登山者に「見て確認してください」とばかりに、こちらを向いて建っています。

武甲山への登頂を重ねるうちに天然記念物カモシカに出会ったことがあります。西武鉄道横瀬駅から右へ線路沿いを歩いて根古屋の集落に入ると、石灰岩採石場のトラックが頻繁に往復しています。この道は二ホンンザルの群れが出没する楽しい道でもあります。道路に沿って流れるのは、生川「おぼっかわ」です。生川の釣り堀を通り抜け舗装の林道を行くと、右に登る登山口があります。一時石灰岩採掘の発破のため正式な右に行く道は一時通行止めとなり、左側にトラバースする道が新たに造成されました。その新しい道から下を見ると、なんと二ホンカモシカがこちらを向いてじっと動かずにいます。急いでザックからカメラを取り出し何枚か撮影しました。その時、同じ道を後から来る人の気配がしたので、カモシカに向かって大声で「早く行きなさい」と声を挙げました。すると判ったように踵を返してゆっくりと林の中に姿を消してゆきました。その写真を直ちに特派員の方に連絡いたしたところ、翌日の読売新聞朝刊の一面を飾りましたので、覚えておられる方もおいでになるかもしれませぬ。

武甲山の北面はその昔、海底に存在したため、珊瑚が堆積し石灰岩となって隆起したと言われています。これが今では仇となり採掘の標的となっています。

山の西側で細々と採掘が行われていたのは東の間で、武甲山北面の登山道がある東のドウエ、西のドウエを我々はよく登っていたのですが、突然鉾山会社が登山道を封鎖しました。そのため今まで登っていた北面の道は登れなくなり、現在皆様が登っている、横瀬駅から一の鳥居、不動の滝を経て山頂に行く表参道のルートしなくなりました。

困った私は武甲山御嶽神社（斎藤宮司）の正式な氏子となりました。毎年6月1日の開山日には、横瀬町役場の駐車場に集合して、鉾山会社差し回しの専用車で石灰岩採掘所を経て山頂に向かいます。採掘場への入口は2カ所ありました。一つは直線の舗装道路を登って行き、途中で隧道に入ります。もう一つは直ぐに隧道に侵入し迷路のようなトンネルを右へ左へと走り、運転手は間違いなく導いてくれます。やがてトンネルを抜けると石灰岩採掘の台地に飛び出します。石灰岩の台地では正月三が日を除いて毎日2台のブルドーザーが動き回っている光景に出会います。しかしこれは誰にでもできることではなく、6月1日の開山日に武甲山御嶽神社の斎藤宮司と私を含めた神社の氏子代表、鉾山会社2社の役員を乗せた車のみです。

戦後我が国は復興で建築ブームとなり、フィリピンや他国から石灰岩の輸入が拍車をかけていました。かつて滋賀、岐阜両県境にある標高1377mの伊吹山で石灰岩採掘の現場を見学した事があります。各種薬草や伊吹もぐさで著名な伊吹山ですが、長年の石灰岩の採掘で著しく姿を変えた山容は無残としか言いようがありません。武甲山も同じ運命を辿るのではないかと危惧しています。

以前、山の本に依頼されて書いたことがあったのですが、武甲山が未だ採掘される前の山頂は、今の山頂より少し南東に位置し、1336.3mの高さでしたが、現在の地図では山頂の移動とともに、1304mとの標高が印刷されています。

秩父の名峰、武甲山は江戸時代の絵師 谷 文晁の「日本名山図絵」にも登場するほどの名山として知られていましたが、現在親しまれている深田久弥選定の「日本百名山」からは、山の荒れ肌の評価からか、残念にも脱落してしまいました。

夏になると今は無い水場に夜にはヒメホタルの青い光が幾つも瞬いたものです。ネパールヒマラヤでは今も沢山の蛍が沢山瞬いています。武甲山では完全に絶滅しました。残念です。また武甲山中腹の緩い傾斜の広場ではよく親子の鹿が戯れていました。しばらくの間立木に化けた積りで、親子の姿が消えるまで佇みました。

山頂の御嶽神社殿前にはオオカミの石像が控えています。武甲山は神の住む山です。高校山岳部時代の鍛錬で今の健康と成長を培ってくれた有難い山なのです。お陰様で以来今日まで600回を超える程山頂に立つてきました。これからも多くの登山者を迎え入れて、人々の成長と安寧をお守り頂きたいと願っております。